

二ふたつ池いけのきつね

むかしのことです。

横根村よこねに住んでいるお百姓ひやくしやうさんが、野良仕事のらの帰りに、二つ池の近くで道に迷まよってしまいました。

「あれあれ、おかしなもんじゃ。いつも通っている道なのに、迷ってしまいました。不思議なこともあるもんじゃやて。」

といいながらも、いつもの通い慣なれた道を探さがそうと、あちこちを歩き回りましたが、どうしても見つかりませんでした。

そうこうしている間に、もう辺りは真っ暗になってしまいました。

「おかしなもんじゃ。きょうのわしは、どうかしておるのう。どれ、まずは、気持ち
を落ち着けにやあ。」

とつぶやきながら、そばにあった松まつの木の根元にこしを下ろしました。

「どっこいしょ。一服するかのう。」

といいながら、こしにはさんであつたキセルを取り出し、口にくわえ、火をつけよう

としました。

すると、突然、どこからともなく、

「キセルに火をつけてはならん。帰れなくなるぞよ。」

と、この世のものとは思えないおそろしい声がしてきました。

おどろいたお百姓さんは、立ち上がり、声のした方を見ましたが、だれもいません。

「だれじゃ。そこにおるのは。」

とどなっても、何の返事もありませんでした。

「わしの空耳かのう。」

お百姓さんは、再び、松の根元にこしを下ろして、キセルに火をつけようとしてしました。すると、

「キセルに火をつけてはならん。帰れなくなるぞよ。」

と、また、おそろしい声がしてきました。

「いったい、何者なんじゃ。いつまでも、こんなところにおったんじゃ、たいへんなことになるかもしれん。」

こう思いながら、ぶるぶるふるふる手で、何とかキセルをしまいました。

「早く家に帰らなけりゃ。」

お百姓さんは、荷物を持つと、足早にその場からはなれました。

しかし、行けども行けども、いつもの見慣れた道には出られませんでした。

「どうしたらいいんじやろう。」

どほうにくれたお百姓さんは、道ばたにこしを下ろして、ついキセルを取り出して、一服しようとしたとたん、

「キセルに火をつけてはならん。帰れなくなるぞよ。」

と、またまた、おそろしい声がしてきました。

「助けてくれえ。」

お百姓さんは、大声でさげびました。

すると、どこからともなく、何人かの声で、

「ちえつ、せつかく楽しんでおったのに、じゃまが入ってしもうたわい。」

という、話し声が聞こえてきました。

「助けてくれえ。」

と、お百姓さんは、少しでもその場から逃げ出そうともがきますが、こしがぬけたままで、思うようになりません。お百姓さんの耳に、今度は、遠くの方から、おおぜいの人の声が聞こえてきました。時には、大声で呼んでいる声も聞こえます。

「わしはもう、ここでもものに取り殺されるんじや。」
と思うと、なみだがこぼれました。

「もう、だめじや。」

お百姓さんは、覚悟を決めて、目を閉じました。
しばらくして、だれかが、名前を呼びながら、体
をゆさゆさゆすりしました。

お百姓さんは、こわごわ目を開けて、その人を見
ました。すると、それは、となり近所の人ではあり
ませんか。

「ああ、助かった。」

ほつとしながら、お百姓さんは起き上がりました。
まわりの景色は、先程とは違って、見慣れた景色に
なっていました。

「おめえの帰りがおそいもんで、家の者が心配して
のう、村の庄屋さんのところに相談に行つたんじ
や。そうしてのう、みんなで探しに来たんじや。」



それにしても、おめえはいったい何でこんなところでねてたんじゃ。」

お百姓さんは、今までのことを村の人たちに話しました。

「わっ、はっ、はっ、は。それは、きつねに化かされたんじゃ。わしもそんなことがあった。じゃが、何いうとると思つて、キセルに火をつけてやったら、きつねがにげていったわい。化かしぎつねは、こつちが気弱になればなるほど、おもしろがつてつけこんでくるんじやと。おかしいなと思つたら、うんと気張ることじやて。」

と、村人のひとりがいいました。

お百姓さんを初め、みんなが、なるほどとうなずきました。

横根地区に伝わる話です。

前の二話と場所が同じ道すじと思われまますから、化かしたのは同じきつねかも知れませぬ。きつねは、タバコのけむりが大きらいだといわれています。ここでは人が化かされつばなしでなく、化かされなくふうがあります。